

寺町の景観特性に関する研究 ～ 松江・広島・京都における寺町の比較を通して～

広島工業大学都市建設工学科 正会員 今川朱美
広島工業大学都市建設工学科 学生会員 ○角 芳則

1. はじめに

中世～近世日本では、暫時性を良しとした伝統がある。都市建設に関するこのような日本人の感性は、都市や構造物に耐久性を求める西洋の都市文化とは異なる都市環境をもたらした。そうして構築された日本の風景は、都市の近世（16～18世紀）において、領土を守るため防火対策がなされるようになる。商業・工業の地域は木造市街地とし、場合によっては戦闘の犠牲になることを余儀なくされた。しかし、城郭は防火構造となり、寺院・神社・宮殿は、外壁に守られ庭園という防火帯によって歴史的景観の保存（伝承）を可能とした。にもかかわらず、近代化した日本は、伝統・文化・経済・社会などの価値観の変化により、これまでの工芸的な都市風景が工業化によって恒久的（西洋的）な都市景観へと変容を見せることになった。

その都市景観の変容を抽出し、日本らしい風景とはどのようなものか、また、我が国には将来に向かってどのような景観をデザインすればいいのかを明らかにすることが本研究の目的である。

そのために近世～近代～現代を繋がないでいる都市景観として「寺町」を上げ、その町並みを街路を中心に評価を行う。なお今回は、島根県松江市寺町、広島県広島市中区寺町、京都府京都市寺町通の3つのエリアを調査の対象とし、その町並みについて記述するものである。

2. 寺町の形成

（1）島根県松江市寺町

かつて市域に分散していた寺院を、城郭防御の目的を持って一箇所に集めたものである。寺町・和多見町一帯には、かねてより寺院の集積が見られたが、江戸に入り初代城主である堀尾吉晴公によりさらに十箇所以上の寺院が富田（広瀬町）から移転され門前町として栄えた。

現在では橋南の寺町地区内の善導寺横丁（W=5m）では、市民参加型の景観デザインに取り組んでおり、

平成11年より「まつえ・まちづくり塾」を結成。歴史的景観保存とまちなみ・まちづくりを実施している。



図1 島根県松江寺町



（2）広島県広島市中区寺町



図2 広島市中区寺町

広島城下から山陰へ向かう可部街道が、寺町通と重なっている。寺町通の北端には横川橋があり、北部（山

陰)からの侵入を防ぐ重要な地点であった。広大な境内と藁葺の寺院は、合戦時軍勢の陣地としても利用できる。この地に寺が集められたのは、慶長14年(1609年)前後の福島正則の時代。12坊の寺院を集め内防衛線とした。また城郭のある洲と地方を結ぶ橋のある周辺には必ず寺が集中的に配置されている。

(3) 京都府京都市寺町通

天保年間の豊臣秀吉による京都改造計画の一環として寺町の整備が行われた。大阪城下町における寺町を天正11年(1583)天満東寺町および城南にある寺町に着手しており、大阪の延長戦の計画として京都は天正15~19年に実施された。寺院を集中的に周縁部に配置することによって洛中と洛外を分け、それと同時に寺院に防衛線の役割も兼ねさせた。



図3 京都市寺町通

3. 寺町のまちなみ

寺町通において、現地調査を行った。景観デザインを考える際、道路幅員と建物高さの関係が重要であるため(文献2)p33)道路幅員と両脇に建つ建造物高さを計測した。計測した値から、「 a =道幅/ b =道路に面する建造物の高さ」を求めた。値が小さくなるほど、道幅が狭い、または、両脇に高い建造物があるということになる。今回は、比較を容易にするため、外壁($H=1.82m$ 又は $2.4m$)の箇所を年毎に3~4ポイント抽出した。

それぞれの道幅における壁高の比は、京都が一番小さいから道幅が他の寺町通りより狭いことがわかる。京都の寺町実測値を確認しても、京都は $W=6.5m \sim 7.7m$ であったのに比べ、広島は $W=10m$ 、松江は

$W=1240m$ であった。ただし、松江は広島・京都のように主たる街道(寺町通)が形成されておらず、路地的な通り抜け路は $W=5.2(P, P)$ であった。松江においては、そういった路地において歴史的なまちなみ(街道風景)が保存されているのが現状である。その理由は車の通過を可能とするか、歩行者専用道路にするかということにあると考える。路地=歩行者専用道路の場合は、人間の視野に広がる風景をよいものにしたという思いがより強まるため、町並み保全の対象として取り上げられやすいのではないか。京都の寺町を見ても、道路幅員の狭い地区(鞍馬口周辺など)は、歴史的な建築物も存在し、歴史的町並みが保存される傾向にある。

ることが伺える。また、京都はマップからも読み取れるようにほとんどの寺院が道路を挟んで東側に建っていることが伺える。これは、お土居建設の際、東側のお土居に沿って南北に寺を配置したため、寺院群の西側に寺町通を設けることになったという歴史的な事情が、引き継がれているためである。

表1 松江・広島・京都における道幅/壁高

指標	松江	広島	京都
道路幅(D)/壁高(H)	P	5.07	4.13
	P	2.86	4.13
	P	2.86	4.71
	P	-	4.13
	平均	3.6	4.22

4. まとめ

今回の調査での気づきを挙げると、寺町において道路の拡幅を行った地区は、まちなみの保全状態がよいとは言えない。寺町建設当初の道路幅員のエリアは、歴史的な建築物が残っている(建替えが困難なため)だけでなく、車の通行がほとんどなく、人の歩く速さでの視界(風景)が考慮されるため、景観デザインへの配慮もなされていることが多い。

今後は、景観評価方法を変えて様々な角度より寺町を評価し、より良い景観デザインを提案していきたい。

参考文献

- [1]高橋康 etc 『図集 日本都市史』東京大学出版, 2001
- [2]萩島哲 『広重の浮世絵 風景画と景観デザイン』九州大学出版, 2004
- [3]土井作治 『図説 広島市の歴史』郷土出版社, 2001
- [4]足利健亮 『京都歴史アトラス』中央公論社, 1994